

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ ひょうげ祭りの裏舞台と横岡山古墳を訪ねる

講師 小比賀 勝博

(ひょうげ祭り保存会事務局長)

小川 賢

(高松市文化財専門員)

平成20年8月24日(日)

共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

香川県指定有形民俗文化財（昭和四十年四月三日神具一式）  
香川町指定無形民俗文化財（昭和六十一年三月三十一日ひょうげ祭り）

## ひょうげ祭り

一、祭りのあらまし

黄金色に実った稲穂がさわやかな秋風に揺れるころ、香川町浅野の高塚山たみづかにある新池神社（池宮いけのみやさんともよぶ）を中心に繰り広げられる牧歌的な祭り、それがひょうげ祭りである。祭日は旧暦の八月三日（現在は九月第二日曜日）である。この祭りは古くから浅野地区の人々の手によって継承されており、神輿みこしの渡御とぎよに使われる神具はすべて農作物や家庭用品などを中心としたもので整えられている。供侍とくじ（神輿の巡幸に参加する供奉人くわぶにん）となる人々はそれぞれに工夫をこらした仮装をし、色あざやかな顔作りをする。

神幸しんこうの順路は浅野高塚山の頂上から東赤坂―坂下―道端―赤坂―丸山―新池（香川町大字川内原）までの二キロ余りで、その間をひょうげてねり歩く。

ひょうげるとはおどけるとか、滑稽こっけいというくらいの意味であり、ひょうげ祭りという呼び名もここからつけられたものであろう。この祭りについては、新池を築いた人々の功績をたたえるとか、豊作の祈願ないしは感謝



御渡神輿



前夜祭

などと意義づけられているが、香川町内の一部には古くから地藏盆の日に作り物と  
 いて、野菜や家庭用品その他で人形などを作って見せる風習があった。それがい  
 つの頃からかこの祭りにも取り入れられたものであるう。

## 二、祭りの起源と変遷

池の築造をはじめとする多くの普請ふしんにはたくさんの方の農民の労力と費用があてられた。  
 したがって普請が成就したときの喜びと感謝の念はひとしお深いものがあつた。だろ  
 うが、その反面には反感やねたみも起き、それが人々  
 の心の奥底に残つてあるいは神に祀りまつ、あるいは種々  
 の伝説となつて今日まで語り継がれている。ひょうげ祭りもその一面をもつ  
 ものであろう。

祭りの起源はさだかではないが、新池築造の主人公といわれる矢延平六の  
 事略じりやく（松平家登仕録参照）や土地の言い伝えなどから考えて、約三百年前  
 のことかと思われる。しかし、今のような神幸行列は明治以降であらう。

この祭りは古くは、浅野地区を赤坂上下、坂下・東赤坂、万塚上下、実相  
 寺上中下、久保・上浅野・八王子・池側・船岡の一部、山下・横岡上下・カヲト、  
 西荒上下・上かみ・宮前・道端・安西荒あんざいの八頭組に分けて毎年一組ずつで執行



顔作り

されていた。その後、浅野青年会、水利組合（現在の香川町浅野土地改良区）と引き継がれ、浅野地区を一号・二号・三号・四号の四地区に分けて行ってきたが、平成九年より、ひょうげ祭り保存会によって繰り広げられている。

このように移り変わりはあっても、郷土の文化遺産が多くの人々の手によって支えられ受け継がれてきていることに変わりはない。

### 三、神事、神輿渡御の順序

浅野郷社八幡宮行事規定に「本規定二定メナキモノハ旧慣例ヲ参酌シテ、総代会之ヲ決ス。」とあり、この祭りも旧慣例にしたがって行われている。

まず祭りに先だつて矢延平六の冥福を祈るため、浅野土地改良区による前夜祭が実相寺において行われる。秋の夜風は獅子舞の鉦、太鼓の音を伝え、祭りの気分はいやがうえにも高まってくる。（高松市三谷町犬の馬場の野口庵においても当地の水利統制委員が中心になっていて、現在は糠山地土地改良区が公民館で供養を行っている。）当日は高塚山頂上に幟をたてたり、祠に神饌を供えたり、ご神灯をあげるなどの準備もする。神輿渡御の神具は多くの人々が一週間も十日間もかけて和やかなうちに精魂を込めて作り上げる。

待ちに待った祭りの当日、日ごろ田畑仕事などに汗水を流している人々も、この日ばかりは待姿になって、神幸の用具を持って高塚山麓に勢揃いをする。その間に高塚山頂では浅野八王子八幡神社の神職が修祓をし



氏子の神職



て祝詞のりとを上げる。その後、山を下り、神輿みたまうつに御霊移みたまうつしの儀式を行う。これで正式の神事が終わって、氏子の神職が登場する。その頃には浅野地区の人々や近郷近在の人々はもとより、県内外からの参詣人も大勢詰め掛ける。汲めども尽きぬ野趣やしゆただよう神輿渡御かみゆりがいよいよ始まるのである。

その行列順序はおおむね次の通りである。(資料は昭和三十年代後半)

- 獅子 各地区からの奉納獅子
- 一、先さき 駆が け (一人) 紙の陣羽織、ももひき、縄帯、ぞうり、竹、鈴、拍子木ひょうしき
  - 二、露つゆ 払はら い (一人) 竹槍、銀紙、なす、ひょうたん
  - 三、陣じん 鉦かね (一人) 火箸、鎖、棒
  - 四、奴やこ (五) (十一人) わら、竹、白紙、金銀紙、色粉
  - 五、袋ふくろ 傘がさ (二人) 竹、紙、墨汁
  - 六、四神しじんの鋒ほざ (各一人) 長さ約二・五メートルの鋒の先に次の四神をつける。
  - 1 青せい 竜りゆう (りゅうへび) わら、針金、なす、竹
  - 2 白びやく 虎こ (とら・さる) ひょうたん、なす、へちま、しゅろ皮、竹
  - 3 朱す 雀さく (とり) わら、鳥毛、花
  - 4 玄げん 武ぶ (かめ・へび) なす、かぼちや、竹
- 七、太 鼓 (二人) 貯米器またはドラムかん、飼料袋、竹



巫女・稚児の行列



四神・奴など

- 八、唐から 櫃びつ (二人) 木箱、縄、白紙、竹
- 九、はさみ箱ばさみ (二人) ボール紙、わら、竹
- 十、鉄 砲 (一人) 竹、わら、針金(約二メートル)
- 十一、弓 (一人) 竹(木)、なわ、白紙
- 十二、長 刀 (二人) 竹、わら、白紙(ボール紙)
- 十三、鼻高の面 (一人) かご(顔)、しゅろ皮(眉毛)、へちま(鼻)、一枚はまの下駄げた、里芋の茎(刀)
- 十四、劍 (一人) 竹、わら、白紙(ボール紙)
- 十五、太 刀 (一人) 竹、わら、白紙(ボール紙)
- 十六、金 幣 (一人) 竹、わら、金紙
- 十七、 神 (一人) 神、白紙
- 十八、白 幣 (一人) 竹、わら、白紙
- 十九、楽がく 人にん (三人) 竹笛
- 二十、巫女みこ・稚児ちご (十人) 白衣、緋袴ひばかま、白足袋
- 二十一、神 職 (一人) のれん、蚊帳をまとう(祭服) ボール紙、葉らん、日傘、飯しゃもじ、かご
- 二十二、神 馬 しゅろの皮で頭、胴、足などをつくる。
- 二十三、別 当 (三人) しゅろ皮、わらじ
- 二十四、神 輿 (八人) 竹、桧葉、色紙、綿、鏡掛、鈴(神輿は大きき約一メートルの台の上に載せる)



鼻高の面



池に投げ込まれる神輿

この神輿渡御に参加する供侍（供奉人）の衣装は飼料袋、ぬか袋などを材料にして袴（かまも）をつくり、それに色粉などで彩色をしたり、銀紙を貼りつけるなどしてつくる。

よ頭にはくだものかごなどに紙を貼って墨汁を塗ったもの、しゆる皮を編んだものなどを着け、足には白足袋、わらぞうりを履く。そして腰には里芋の茎にかぼちやを輪切りにしたものか、ボール紙の鐤（つば）をはめた太刀（たち）を格好よく差している。神幸祭用具や衣装にはすべて池の紋が着けられている。

町内外から里帰りをした人々、それに近郷近在から集まった大勢の人々の見守る中をひょうげながら、かつ、のどかにねり歩いた行列はやがて新池に到着する。

池の中のお旅所で氏子の神職がうやうやしく修祓をした後、悪魔払いの矢が池の空高く射放たれ、神輿は池の中に威勢よく投げ込まれる。獅子舞の鉦、太鼓の音もいちだんと高くなり祭りはどここおりなく終わる。（なお奉納余興として、かつては仕掛花火、芝居、子ども相撲なども盛んに行われていた。）



四、新池と水利慣行

新池は宝暦五年（一七五五）の香川郡東村々溜池記録によると

新池 川内原にあり

水掛高 三百四十八石四斗四升七合

百三十一石七斗二升三合 興シ免

九石四斗四升三合 実相寺領

五十二石二斗八升一合 本実相寺領

百五十五石 山田郡三谷村

北本堤 根 置四十二間 高さ七間 上幅三間半 長さ百三十六間

東堤 根 置 十六間 高さ一丈五尺五寸 上幅三間 長さ百六十四間

西堤 根 置 十六間 高さ三間七歩 上幅三間 長さ九十六間

本搖 梅打盤 長さ四十二間 内法只今水溜相知れ申さず候

縦 樋 松打盤 長さ十一間 厚さ四寸 内法縦八寸 横九寸

矢 倉 四力所 柱数二十四本

とあり、その後何回かの堤の高上げかさあげ工事によつて、今では本堤の堤長一八〇メートル、堤高一五・一メートル、貯水量二二万七八〇〇立方メートルの大きい池となった。そして浅野地区、川東地区、高松市三谷町犬の馬場地区、同市仏生山地区の一部を合わせて受益面積は二二〇ヘクタールとなっている。（資料は香川町誌による）



悪魔払いの矢



水利慣行として、ゆる抜き一週間ほど前には「井手ざらえ」が行われる。かつてはゆる抜き後二日は高松市三谷町犬の馬場地区にオハツツアンミズと云って優先的に配水するという慣行などがあったが、現在は廃止されている。

## 五、新池築造の伝説

この池は寛文年間（一六六一—一六七三）に藩普請として、藩の費用で築造されたものと伝えられ、次のような伝説が残されている。

「もともと、浅野村（香川町大字浅野）の土地は高低がはなはだしくかつ荒廢地も多かつた。藩では、開墾はさせたけれども水の便が悪く農業用水には非常に困っていた。これを見かねた藩では矢延平六らに命じて溜池を作らせることになった。平六は大河原某および篠原某らと話し合い、川東村（香川町大字川東上）の西を流れている香東川の水を引いてくることにした。暗夜にちようちんや松明たいまつを持った人々を遠く離れたところから見通して土地の高低を測定し、多くの労力と歳月を費やして、遂に川内原に面積二十六町歩にわたる新池を築いた。平六と大河原、篠原の両氏は三谷村（高松市三谷町）犬の馬場に住んでいたもので、この新池の水は犬の馬場方面にも引かれるようになった。農民たちの喜びはひとしお大きかつたが、ここに一大事が起こつた。

それは平六がこの池を築いたのは『高松城を水攻めにするためである。』と領主にごん言をした人があり、それによつて平六は裸馬に乗せられて阿波国に追放された。ある年の旧曆八月三日のことであつた。

平六を慕う地方の農民はその行方を求めたが、遂にその姿を探し出すことができなかった。そこでせめてそのご恩に報い、これを後世に伝えようと新池を見下ろすことができる高塚山の頂上に小さい祠を建てて、神様としてこれを祀った。これが新池神社であるという。」（新池築造之碑・新池神社修復記念之碑参照）  
今年もまたひょうげ祭りの季節がめぐってきた。夏の暑さとたたかひながら泥に足を踏み入れたかゝがあつて、稲穂が重たそうに頭を垂れている。その中を素朴で土のにおいのする行列がえんえんと続く。祭りを行う人も見る人もすべての人が恍惚とした気分こうこつにひたっている。父母から子へ、子から孫へと受け継がれてきたこの祭りをこよなく愛し育ててゆきたいものである。

資料（高松藩祖松平頼重伝・香川町誌による）

○矢延平六・松平家登仕録によると

「矢延庄兵衛 初平六郎 天和元年酉 庄兵衛 年月不知代官手代 寛文四辰十二月十二日米三石御加増 同八申年米十石二人扶持郷方手代 年月不知御勘略ノ時分、御暇申上願之通被仰付 延宝七未正月廿四日、郷方井川ノ御普請等功者二付、郡奉行申出候、依テ相談ノ上達御耳候所、御調法ノ者二候ハバ被召出、郡奉行共エ預置候様被仰出候二付、其旨申渡御切米十三石二人扶持被下 以後成行不知」とある。

○昭和五十六年に「四国のみち」が新池と小池の間にも設けられ、石畳の小径こみちがつけられている。

○新池築造之碑

新池は江戸時代初期に矢延平六が築造したと伝えられる平六は矢野部平六・伝六・兵六とも呼ばれた水利土木技術者で浅野一帯の水利の乏しきを憂い有志と謀り地をトし香東川より取水せんと暗夜に松明を用いて土地の方位高低を測るなど苦心慘憺し多くの労力と歳月を費し遂に川内原に面積二十六町歩の溜池を築造その後連年嘉穀を得るに至る伝承によれば新池築造は高松城を水攻めにせんがためだとの讒説が広まり之により平六は八月三日裸馬に乗せられ阿波国へ追放さる農民達は東奔西走して踪跡を求めしが遂に探し得ず人々は相謀りその恩に報いんと新池を俯瞰する高塚山頂に小祠を建立し新池神社として崇めた神事は旧暦八月三日浅野地区の人々によりて執行され神輿の渡御は神社から新池に到る沿道二キロにわたつて行われその神幸の行列の様が滑稽であるがためにひょうげ祭と呼ぶ祭に用いられる神具一式は農作物などで作られそれらは昭和四十年香川県民俗資料の指定を受け昭和五十年香川県指定有形民俗文化財となる此度新池神社の修復を機に平六の偉功を偲び祭の由来を刻したる碑を建立し永く後世に伝えんとするものである

昭和五十九年八月吉日

香川町浅野土地改良区

中原 耕男 撰  
宮本 正 書

○新池神社修復記念之碑

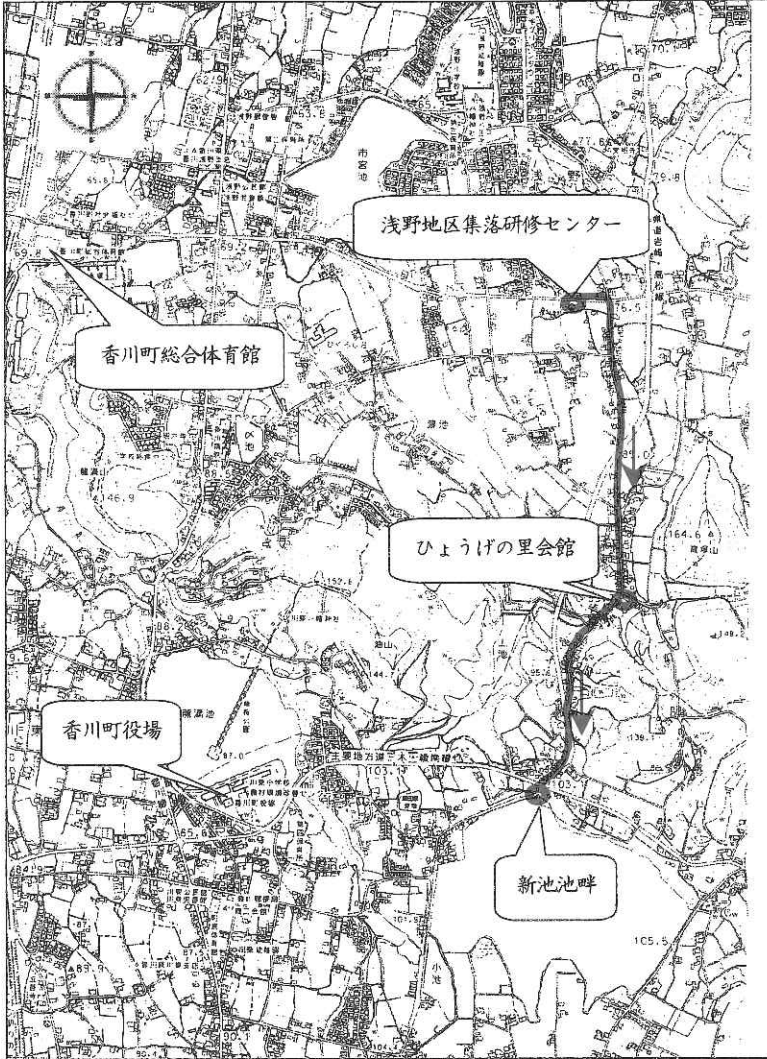
新池神社は江戸時代に創祀される祭神と崇められる矢延平六は水利土木技術者で浅野一帯の水利の乏しきを憂い有志と謀りて香東川の水を引きて川内原に陂池を築き新池と名付くしかるに平六のかかる事業は高松城を水攻めにせんとするの讒に遭い阿波国へ追放せらる里人はこの高塚山頂に小祠を建て水神を勧請し平六の霊を慰む爾来毎年八月三日を例祭と定めその祭事今に絶ゆること無しされど幾星霜を経るに及び基壇の石積み等の補修を余儀なくされるを機に浅野土地改良区が修復を計り浄財を募るよりて石祠と参道の修理をなし鳥居を造り嘗むここに梗概を叙し後葉に残すものなり

香川町浅野土地改良区

昭和五十九年八月吉日

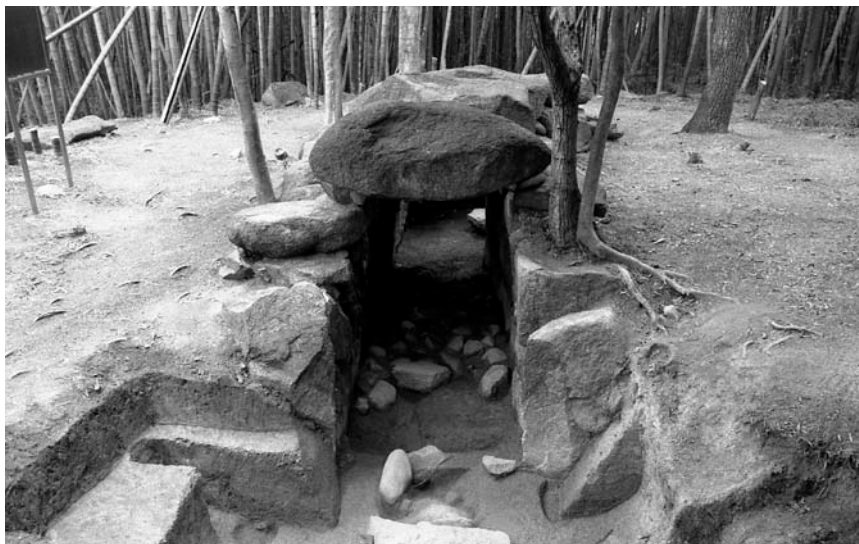
中原 耕男 撰

ひょうげ祭り渡御図





## 二 横岡山古墳



横岡山古墳石室正面（平成19年度調査時）

### 1 横岡山古墳の調査の経緯

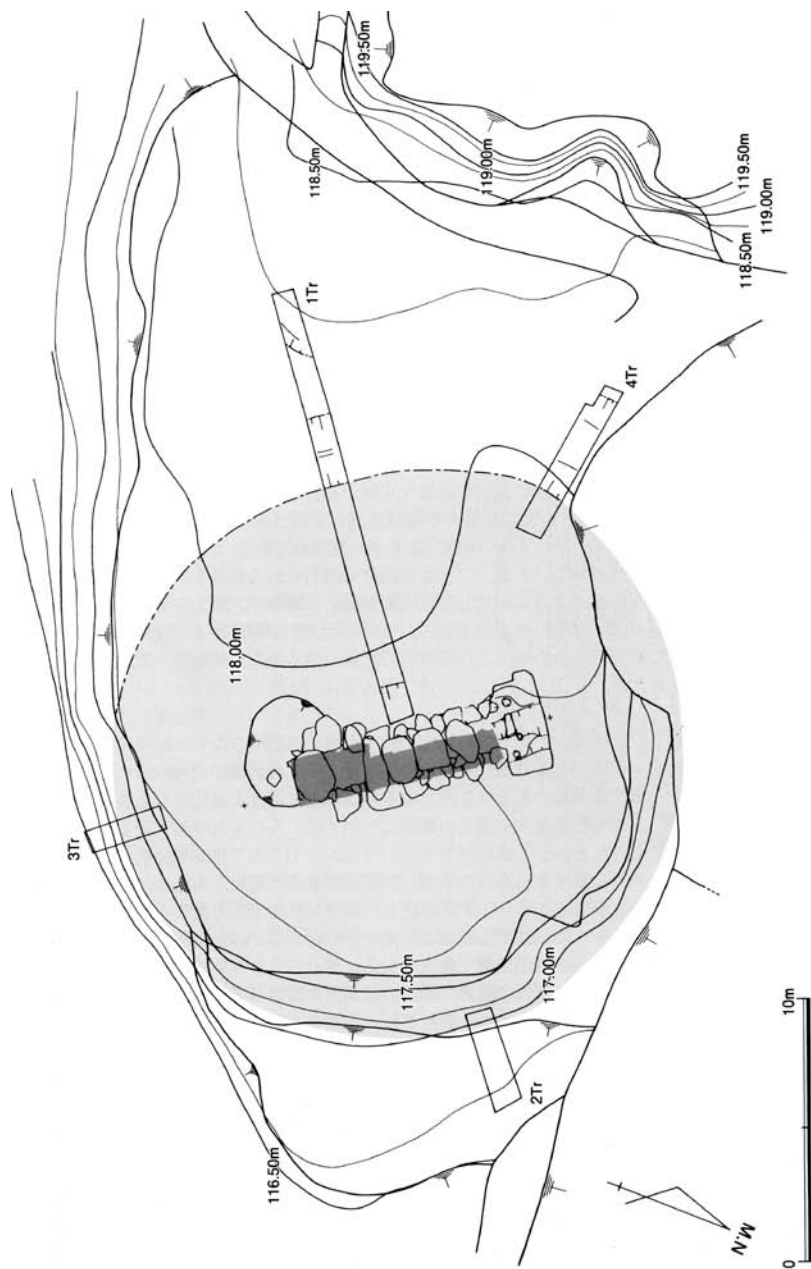
よこおかやまこぶん

高松市香川町浅野に所在します横岡山古墳は、昭和初期に地権者によって発見・発掘されたことが『香川町誌』などに記されています。この後、周辺は果樹園となっていた時期もありましたが、昭和六十一年に旧香川町の指定史跡となりました。また、発掘で出土した須恵器などの出土品は浅野小学校などで保管されてきました。その後、平成十八年一月の高松市との合併によって、現在は市の登録史跡となっています。この合併を契機に高松市教育委員会では、古墳の内容を確認するため、平成十九年度に測量調査と部分的な確認調査を実施しました。

## 2 横岡山古墳の立地と墳丘

横岡山古墳は、旧香川町の川東、大野、そして浅野地区にわたる龍満山東側の丘陵上に位置しています。この山は、明治五年に徳島県の剣山大権現社より分霊を受けた社が山頂にあったことから、剣山とも呼ばれています。また龍満（立満）は、香東川を望む山の西側に見られる地名で、古墳のある東側丘陵部は横岡山とも呼ばれています。古墳の北側には住宅団地がありますが、団地造成前の地図によれば、石室が開口する北方向を中心に丘陵が大きく広がっていたことが分かります。この丘陵の頂上からの眺望は素晴らしく、北方向に高松港や屋島そして五剣山までよく見渡すことができます。

現在、古墳がある丘陵の頂上は、開墾やミニ四国霊場（剣山四国霊場巡礼の順路と草庵）によって平坦で開けた場所になっており、横穴式石室の天井石が露出していますが、本来は盛土によって墳丘が築かれ石室は隠れていたと考えられます。平成十九年度の発掘調査では、石室の中心から十一m西側で周溝と呼ばれる溝が見つかっています。この溝は古墳の境を示すとともに、溝を掘った土で墳丘の盛土を行うためのもので、この確認した溝と石室の東と南に見られる地形から判断して、直径約二十二mの円形をした墳丘であったと推定できます。

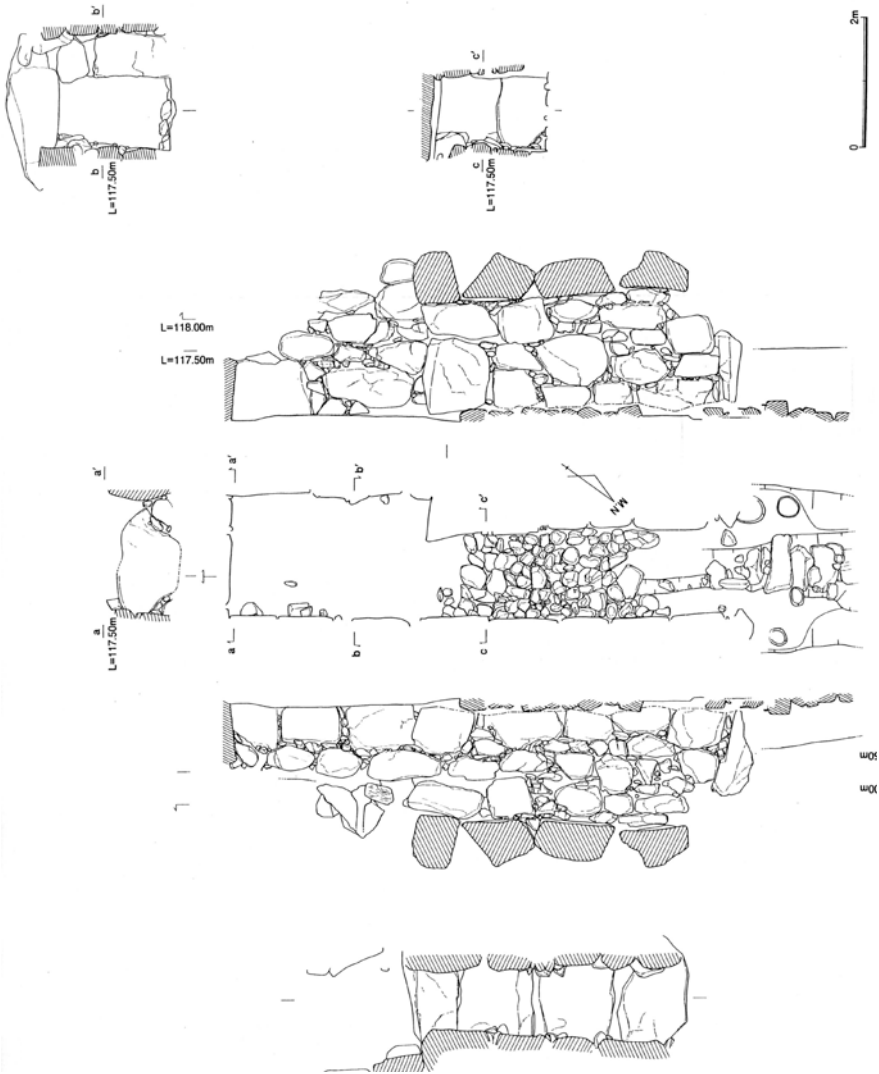


横岡山古墳墳丘測量図

### 3 横岡山古墳の石室

横岡山古墳の石室は、北方向に開口する横穴式石室です。横穴式石室とは古墳の側面に入り口を設けた石室で、この入り口を塞いだり、また開いたりすることで複数回にわたって棺を納めることができます。古墳時代前・中期に用いられた原則一回限りの埋葬である竪穴式石室とは構造や機能が異なります。また横穴式石室は棺を納める玄室とこれに通じる羨道からなりますが、横岡山古墳の場合、玄室の長さ3m、幅（奥壁の幅）1・8m、羨道の長さは4・5m、幅（玄門の幅）は1・2mとなります。また玄室からみて左方向にだけ玄室の幅が広くなることから、左片袖式石室に分類されています。現在のところ、香川町浅野地区で知られている横穴式石室は、横岡山古墳の他、東赤坂古墳、浅野八王子古墳、万塚古墳と片袖式が占めています。石室の石材はこの山で産出する大きな花崗岩で、羨道は三段相当の側壁と四枚の天井石で構成され、玄室は側壁で四段相当積んでいたと推定されます。玄室は上半分が壊れています。天井石が残る羨道では幾つかの特徴を見ることができません。羨道は長くしっかりとした造りになっていて、床には川原石を敷き、さらに石の蓋をもった排水溝を備えていることが、平成十九年度の調査で確認できました。また石室の入り口にあたる羨道の末端は、両側面に立石を用いており、羨門と呼ばれる構造にもなっています。





横岡山古墳石室測量図

## 4 横岡山古墳の出土品

横岡山古墳の出土品は往時の発掘のものを含めると、頸飾り（小玉）や耳飾り（金・銅環）の装飾品、刀、馬具などの鉄製品、さらに多数の土器が知られています。平成十九年度の調査時でも、羨道に多数の須恵器などの土器が出土しました。これらの副葬品は、棺



横岡山古墳の出土土器

を納める玄室では盗掘の影響が大きく、また羨道についても追葬に伴う片付けや石室の外に掻き出した行為が推定されるもので、本来の副葬された様子についての詳細はわかりません。

ここでは、一般に横穴式石室に多量の土器が出土することについて引き合いに出される神話について紹介しません。これは『古事記』

などに記されたもので、イザナキノミコト（伊邪那岐命）とイザナミノミコト（伊邪那美命）という男女の神の話です。亡くなった妻イザナミを追って黄泉国に辿り着いたイザナキは、暗闇の中で黄泉国の食事、「ヨモツヘグイ」を済ませたイザナミの変わり果てた姿を見てしまいます。これに恐れをなし逃げ帰るイザナキに、怒ったイザナミは追手ともに追いかけますが、イザナキは大きな石を立てて、黄泉国との絶縁を言い渡す「コトドワタシ」を行ったというものです。

つまり、石室で多数出土する土器は、葬送儀礼に関わった食器類や現世との別離を宣言する儀礼に用いた器であるという解釈することができます。この横岡山古墳の石室では、食事を盛る杯や酒などの液体を入れる壺や瓶類が多く認められる他、石室の出入り口に相当する箇所からは、大きな甕が潰された状態で出土しています。現在、この神話がどの程度、横穴式石室で執り行われた儀礼を反映するものか研究者によつて意見は様々ですが、この黄泉国の神話については横穴式石室とともに当時の人々の死生観を端的に表すもののように思われます。

【参考文献】・『ひょうげまつり』香川町文化財保存会・ひょうげ祭り保存会 一九六六

・『横岡山古墳・城所山古墳群』高松市教育委員会 二〇〇八

・『横穴式石室誕生 黄泉国の誕生』大阪府立近つ飛鳥博物館 二〇〇七